

資料紹介

経済思想家の研究雑誌

杉原四郎

I

ロンドン大学の中央図書館で私がよく使っていたのは、その小じんまりとして落ちついた雰囲気が入ってゴールドスミス・ライブラリをしばしば訪れたが、時には定期刊行物があつまられているライブラリもたづねた。私の所属した LSE の図書室では、経済学の主要雑誌が近着の最近号だけでなくバックナンバーが開架の書棚にならんでいて、容易に雑誌の調査ができたが、社会科学等の雑誌に限られていた。これに反して中央図書館には、世界各国で刊行されている定期刊行物が広い分野からあつまっていて、一巡するだけで小一時間はたってしまうのだった。

特定の思想家を主題とした多種多様の研究雑誌が刊行されているのに気づいたのもこの部屋でのことだった。哲学者や宗教家、又は文学者として有名だが思想家としても見のがすことのできない人々についての研究雑誌が私にはとくに目につく。年鑑の場合は単行本に近いが、10ページ内外の新聞のスタイルの不定期刊のものまで体裁はさまざまだが、体裁としては季刊の雑誌形式が最も多い。そしてこの種の雑誌の中に、社会思想史や経済思想史にゆかりの深い人物の雑誌も、結構いろいろの国から発行されているのだった。

私はこれらの雑誌の刊行地、創刊年月などをメモすると共に、特に興味をひく（そしておそらくは日本では読むことがむづかしそうな）雑誌の最近号のコピーをいくつか持ちかえった。帰国後わが国の大学の図書館でこの種の雑誌を

さがして気づいたことは、案外大学図書館に所蔵されていない(部分的にあってもバックナンバーがそろっていない)ことであった。おそらくその人物を研究している専門家が、その雑誌を発行している研究団体に加盟して会員として直接個人的に頒布をうけているために、大学には所蔵されていないのだろう。大学の中央図書館にはなくとも、特定の学部学科の研究室に入っていることはままあるようである。

だが日本の思想家の研究雑誌は、わが国でかなり発行されており、これは国会図書館はじめ大学の図書館でもかなり所蔵されていることがわかった。戦後にその刊行が盛んになったが、すでに明治時代に創刊されたものもあり(たとえば澁沢栄一[1840—1931]の『龍門雑誌』は明治19年4月創刊、龍門社、今は『清淵』と改題して存続)、さらに外国の思想家の研究雑誌がわが国で、戦前すでに発行されてもいたのである(たとえば『トルストイ研究』(トルストイ会、新潮社)は1916年9月創刊、月刊で1919年1月まで存続；『レーニン研究』(鈴木厚子編、南北書院)は1931年12月創刊、月刊で第8号(1932年7月)まで確認)。これらの研究雑誌の多くは、国立国会図書館に所蔵されている。

私はこうしたわが国で発行された内外の思想家の研究雑誌の調査を開始し、入手できるものはできるだけ実物を(不可能ならそのコピーを)蒐集してきた。そしてその調査結果を『社会思想史研究』(社会思想史学会)の第5号(1981年)、第6号(1982年)、第12号(1988年)、第15号(1991年)にわたって発表してきた(第6号以降は杉原達と共同執筆、また第5号、第6号、第12号の三号の分は「思想家の研究雑誌」として杉原『思想家の書誌——研究ノート——』、内外アソシエーツ、1890年に収録)。『社会思想史研究』の上掲の4つの号に紹介した研究雑誌にとりあげられている思想家の人数は、外国人52名、日本人65名、合計117名にのぼる(1人に2種以上の雑誌が出ている場合がある——例えば河上肇については3種、魯迅については5種——)ので、雑誌の総数はそれ以上にのぼる)。

本稿はそれをうけて、最近に創刊あるいは私が入手しえた研究雑誌のいくつ

かを紹介する。ただこれまでの紹介は哲学者や宗教家や文学者など（たとえばゲーテ、シェクスピヤ、ルター、ヘーゲル、内村鑑三、中江藤樹、良寛、石川啄木、島崎藤村など）をもふくめた広義の思想家の研究雑誌をとりあげていたのだが、本稿では、経済思想史（社会思想史や政治思想史もふくむ）に登場する人物に限定し、わが国で刊行されている彼らの研究雑誌を紹介することにしよと思う。だがそれはIII以下でとりあげ、そのまえにこの種の雑誌の一般的特性について、すこし考えておきたい。

II

思想家の研究雑誌には、大きくわけて二つのタイプがある。一つは大学や学会に所属する研究者によって編集され、執筆者も原則としてはその思想家を研究する人々が組織する会の会員に限られる、つまり研究雑誌はその会員の会報という性格をもっている場合、もう一つは在野の研究者や一般市民のグループが発行する思想運動的な雑誌であって、特定の思想家の人間の魅力や社会的実践を敬慕する人々によって組織された会の機関誌という性格のものである。

前者のケースが多数を占め、思想家についての研究論文や資料・情報紹介が主な内容で、学界の機関誌とよく似ており、発行数も年刊、半年刊、季刊などが多い。これに対して後者は少数だが、この方は特定の思想家について複数の雑誌が出ている（市販されて一般に普及している事もある）ケースが多い。

後者の実例として田中正造の研究雑誌を見ると、『季刊田中正造研究』が田村紀雄の編集発行で1976年5月に創刊された。ややおくれて『田中正造と足尾鉍毒事件研究』が渡良瀬川研究会（代表幹事布川了）から1978年7月に創刊された。前者は1981年11月『田中正造とその時代』と改名され、さらに1984年1月後送誌『田中正造の世界』にうつがれた（発行所谷中村出版社）。また『救現——田中正造研究とわたらせネットワーク』（田中正造大学ブックレット）が発行者杉原辰男、発行所田中正造大学出版社（栃木県佐賀市小中町932）で1986年9月に創刊され、同時に『田中正造大学ニュース』も発行されている。これら

の諸雑誌は、現代の公害反対運動と連繋した性格をもつものである。

河上肇について現在出ている三つの研究雑誌、すなわち『東京河上会会報』(1961年10月創刊、代表白石凡、現在住谷一彦)と『河上肇記念会会報』(1975年12月創刊、代表住谷悦治、現在木原正雄)と『山口河上肇記念会会報』(1986年10月創刊、代表細迫朝夫)は、いまはでていない『河上祭ニュース』(京都大学同学会、若干号は京大経済学部の河上肇文庫にあり)ほどではないにしても、どちらかといえば後者の性格をもっているといえよう。河上に関する研究雑誌的な性格をより多く持っているものは、むしろ『河上肇著作集』(筑摩書房)や『社会問題研究』復刻版(社会思想社)や『河上肇全集』(岩波書店)のそれぞれに附録として出された『月報』であろう。

たとえば『全集』月報は1982年1月に第1号が出され、1986年5月の第36号まで、4年間に毎号12~24ページのパンフレットが36点出たことになる。各界の多彩な人々が寄稿しているが、門下生はじめ河上の影響を受けた人々が多く、河上との関係が敬慕の念をこめて語られる文章が多い。だが客観的な河上研究や新資料の紹介記事も写真入りでなされていて、思想家の研究雑誌としての上述の両面をそなえたものといえよう。そしてこのことは河上の場合だけでなく、著作集や全集の出ている思想家の場合は、その月報が上述の2つの性質をかねそなえた研究雑誌としての実をそなえていることが多いのである。

研究雑誌の前者のタイプが、いまのべた著作者(全集)の月報をふくめて多数派を占めるのに対して、後者のタイプに属するいわば、運動派・評論派の雑誌は、少数派でありながら、そして前者が安定性と継続性が高いのにくらべて持続性がより小さいにもかかわらず、雑誌としてはむしろその思想家を現代の日本に結びつけて個々人の生活の中でその思想を追求するという性格をもっているという点で、よりユニークであり魅力的でもある。これまで私の蒐集した雑誌でいうなら、トインビー(A. J. Toynbee, 1889—1976)について「市民の立場でトインビー文明史観を自主的に摂取」するトインビー市民の会が発行する雑誌のうち、『トインビー研究』(1971年4月創刊)が前者のタイプに近く、

『トインビー市民の会会報』（1968年10月創刊——後『現代とトインビー』と改題）や『Toynbee と私』（1977年6月創刊）が後者のタイプに属する。また賀川豊彦については、横山春一の『賀川研究』（1940年9月創刊、1948年5月第一冊発行）と『賀川豊彦学会論叢』（1985年11月創刊）が前者の、東京の本所賀川記念会や松沢資料館から出ている『レポート』や『ニュース』、また神戸の賀川記念館から出ている『ボランティア』などは後者のタイプに属しよう。これらの諸雑誌については前掲『思想家の書誌』を参照していただきたい。

III

IIでのべたように、私たちは『社会思想史研究』第15号に「特定の思想家を主題とする研究雑誌目録拾遺（続）」を発表したが、その中で日本人の思想家20人、外国人の思想家13人の研究雑誌について紹介した。そのうち哲学者・宗教家・文学者などの雑誌をはぶいた日本人8人と外国人5人の研究雑誌について、その後えた情報を補足しつつのべておく。

(1) 犬養毅（1855—1932）

犬養毅は青年時代保護主義的経済思想の信奉者で、田口卯吉と対抗する経済雑誌『東海経済新報』を発行したり、アメリカの国民主義的経済学者ケアリーの著書を邦訳したりした。その後は政治家として活躍、五・一五事件で死亡したことはよく知られている。『木堂雑誌』は1924年1月創刊され、月刊で彼の死後も存続した。

(2) 大塚金之助（1882—1977）

『大塚会会報』は1981年5月創刊。東京高商、一橋大、明治学院大、慶応義塾大で大塚金之助のゼミナールを出た人々が中心の雑誌で、会員のエッセーの他大塚に関する参考文献や会員の著訳文献が毎号のっている。第22号（1995年5月）は42ページで特集「歌人・大塚金之助」となっており、倉田稔「大塚金之助と短歌」を巻頭におき、「大塚金之助の短歌、この1首」を杉浦明平、坂田太郎、杉山忠平、大岡信ら16人が書き、大塚から利田正男（大塚の『歌集朝あ

け』[1947]の発行者)あての書簡9通が紹介されている。また本号には『著作集』にも収録されていない大塚の「ベートホーフエン抄」(『生活者』第11号, 1927年3月)が,小松雄一郎の解説つきで全文掲載されている。

(3)大山郁夫(1880—1955)

『大山会々報』,1964年6月創刊。大山柳子「大山郁夫の思い出」(第4～6号),「花田大五郎氏からの聴き書き」(第8号以下)など。

(4)賀川豊彦(1888—1960)

前節でふれた『本所賀川記念館レポート』(1969年9月創刊)と『ボランティア』(1964年9月創刊,神戸市中央区賀川記念館)の内容を紹介してある。

(5)河上肇(1879—1946)

前節でふれた『山口河上肇記念会会報』(創刊1986年10月)を紹介した。

(6)佐藤信淵(1969—1850)

『信淵研究』秋田短期大学(秋田経済大学)信淵研究会発行編集,1961年3月創刊,研究論文の他,「信淵先生遺跡探訪」や学生記念の共同研究報告などを載せる。第17号(1976年10月)以降休刊。徳川時代の経済思想家については,安藤昌益(『季刊昌益研究』1974年10月創刊)と三浦梅園(『梅園研究』1970年創刊;『梅園学会報』,1976年5月創刊;『大分梅園研究』,1983年5月創刊,梅園逝去200年記念特集の第6号は1988年5月刊行)についての雑誌がでてくる。

(7)澁沢栄一(1840—1931)

『澁沢研究』澁沢研究会編,澁沢資料館刊,1990年3月(生誕150年を記念して)創刊。研究論文・書評の他澁沢資料館所蔵史料・図書を紹介を載せる。

(8)田中正造(1891—1913)

IIでとりあげた『救現』と『田中正造ニュース』を紹介してある。

この他に私は信太正三,下中弥三郎,津田左右吉,内藤湖南,武者小路実篤,安田武,山本新らの研究雑誌も紹介しているが,ここでは省略した。つぎに外国人の雑誌について。

(1)ウェーバー（Max Weber, 1864—1920）

『マックス・ウェーバーの会会報』マックスウェーバーの会は1972年第1回例会を開いた（発起人代表大塚久雄・増田四郎・丸山真男，代表幹事内田芳明・住谷一彦）。第36回例会（1979年6月）以降，報告要旨が会報として出されるようになる。年3～4回発行，ウェーバーを中心としつつ，とりあげるテーマは広範である。第34号（1990年10月）には福田歓一「『天皇制』を考える」の報告要旨を掲載。B5版6ページ。

(2)孫文（1866—1925）

『孫文研究会会報』（1984年9月創刊，第4号より『孫文研究会会報』となる。神戸市垂水区，孫中山記念館内）。論文，書評，学会情報などが中心で第6号は孫文生誕120年記念号。第10号（1989年8月）には田鍋信一「高校生の孫文観」がのっている。中国人を対象とする研究雑誌としては，他に毛沢東のものが数種（『毛沢東著作言語研究』，1967年1月創刊；『月刊毛沢東思想』，1968年5月創刊；『毛沢東思想研究』1965年11月創刊などがあったが，現在はすべてなし），魯迅が数種（『魯迅研究』1953年1月創刊，『魯迅』魯迅等の会報，1954年7月創刊，1979年3月の第69号で廃刊。『熱風』，1971年1月創刊，『魯迅の会会報』，1980年7月創刊，『魯迅を読む』，1970年11月創刊，早稲田大学新島淳良ゼミナールなど）あった。これらについては杉原『思想家の書誌』174—177ページ参照。

(3)ヒューム（D. Hume 1711—76）とスミス（A. Smith 1723—90）

『ヒュームとスミスの会会報』，関東学院大学星野研究室，1982年6月創刊，スミスについては『アダム・スミスの会会報』が1957年2月に創刊され，現在も存続しているが，これは2人をあわせて主題とした雑誌，経済学史学会や日本イギリス哲学会や社会思想史学会等の会員が多い。

(4)トロツキー（Лев Троцкий, 1879—1940）

『現代史の激動とトロツキー』，トロツキー50周年実行委員会の会報の第1号として1990年創刊。第2号（1990年9月）には，第一回プレシンポと三つのワ

ークショップの報告の他に藤井一行「最近のトロツキー関連文献(-)」がある。

IV

『社会思想史研究』の第15号に発表した「研究雑誌目録拾遺(続)」のあと、あたらしい若干の研究雑誌を私は入手した。以下それら、日本人2人、外国人2人、計4種の雑誌を紹介しておく。

(1)福沢諭吉(1835—1901)

福沢については現在福沢諭吉協会からつぎの2種の雑誌がでていいる。『福沢諭吉年鑑』(1974年8月創刊)；『福沢手帖』(季刊, 1973年12月創刊), 杉原『思想家の書誌』161—162ページ参照。これらの先行誌として戦前に出ていた雑誌について慶応の西川俊作教授から御教示をえたので紹介する。

『福沢研究』。これは福沢先生研究会(慶応義塾の学生団体)が1940年1月1日に創刊した雑誌である。藤田龍次郎の「福沢精神を語り継ぐ塾生集団——OBとの緊密な連繋に生きる——福沢先生研究会——」(『塾』第85号, 1977年10月発行)によれば、この研究会の前身は1918年に誕生した慶応義塾養真青年会という藤田式息心調和法の実践グループであった。週一回の実習後の懇談ではおのずから福沢諭吉に話題があつまって、やがて小泉信三や川合貞吉に来てもらって話をきくようになった。福沢の全集が1926年に刊行されるのを契機に塾の福沢研究熱が高まり、研究会も「福沢先生研究会」と改称、その最初の事業として『三田評論』にのった15編の文学を編纂した『我が福沢先生』を1931年4月に丸善から出し、その中で福沢研究会が慶応義塾養真会を改名して生誕したことを宣言している。

1934年の福沢生誕百年を機に1935年日吉のキャンパスに日吉福沢研究会が創立され、『福沢研究』が1940年1月に創刊という運びになる。第2号(1940年10月)、第3号(1943年6月)と出たが、その後中断、第4号は7年半後の1950年1月に復刊、1967年3月の第9号まで出た。研究会は学生サークルの一つとして存続しているが、有真寮(三田キャンパス)の廃寮ということもあって、雑

誌の発行は現在とだえたままになっている。

第1号には羽仁五郎「体系的哲学者 Systematiker としての福沢先生」、富田正文「福沢先生訳『海岸防禦論』について」など、第9号には小泉信三「徳富蘇峰氏の福沢先生評論に就いて」、西村春樹「教師は福沢諭吉をいかに観ているか」などがのっている。総じて学生やOBの文章はすくなく、福沢研究者の寄稿が多い。父諭吉を語る肉親の文章や福沢の遊学中の一太郎宛手紙なども目につく。現在刊行中の2誌の中では『福沢手帖』に近い内容といえよう。

(2)新渡戸稲造（1862—1933）

『新渡戸稲造研究』第1号は1992年9月1日発行、盛岡市内丸2-10、テレビ岩手1階、新渡戸稲造会（会長、岩持静麻）。A5版275ページ。

岩持は「創刊号発行に寄せて」で、「今度『研究』を発行することになったのは、単に新渡戸稲造の生誕百三十年を記念するというだけでなく、……『平和と調和のための奉仕と愛の精神』（という）新渡戸思想・精神の研究に資するためである」という。新渡戸が最晩年にその会長をつとめた産業組合中央会岩手支会後身岩手農協中央会の会長たる岩持は、毎年9月1日にこの『研究』を継続発刊するとのべている。

創刊号には、『武士道』における「日本的」と「普遍的」、高橋富雄。新渡戸稲造と内村鑑三と宮新金吾、切替辰哉。地方の時代と新渡戸稲造、佐藤全弘。新渡戸稲造博士とメリー・P・E・ニトベ（上）、J・パスモア・エルキントン、加藤武子訳など七篇の他、カガワトヨヒコの詩、「永遠の青年」と資料「ご進講・新渡戸稲造」をおさめる。

第2号は1993年9月1日発行、273ページ。頒価2000円。「第2号の発刊に寄せて」で編集部が、この「第2号は博士の没後60年記念の意味を持たせることにした」とのべ、「監修後記」で佐藤全弘が「百翁田辺定義氏と九十媼松隈俊子氏が……新渡戸が今も生きて在ることを証して下さった」と書いている。

第2号には、つぎの5篇、「有明月に古書を読む——ヴァンクーヴァの新渡戸記念庭園—— リチャード・エルドリッジ・コプリー、佐藤全弘訳。「新渡戸稲

造と賀川豊彦」米沢私一郎訳。エルキントン(加藤訳)の(下)など五篇の他、「新渡戸稲造生誕130年祭(1992年7月3日)の記録——その中に東大代表川田侃と東京女子大代表松隅俊子との追憶談がある——」と、資料として田辺定義「新渡戸稲造の死後のことについて」と藤井隆至「柳田国男に宛てた新渡戸稲造書簡」などがおさめられている。

第3号は1994年9月1日に出た。新渡戸稲造の「平民道(デモクラシー)」を巻頭におき、「平民道に通ずる平民宰相——原敬と新渡戸稲造の大正時代——」内川永一郎(『岩手日報』常務)など11篇の研究論文をおさめている。

本誌の入手については新潟大学教授藤井隆至氏の御世話になった。

(3)マルサス(T. R. Malthus, 1766—1834)

『マルサス学会年報』, 1991年12月, B 6, 95ページ, 頒価1500円。

イギリス古典学派については、すでにアダム・スミスの会(前掲)やミルの会から会報が出ており(『日本「ミルの会」会報』創刊1980年3月創刊, 現在休刊中), リカードウについては邦訳全集(全10巻, 碓松堂書店)の附録として『リカードィアーナ』が出た(完結)が, 今回マルサスの学会ができて, 古典学派を代表する4人の経済学者の研究雑誌が日本からそろって出ることになった。

創刊号には, 久保芳和(マルサス学会会長)の「マルサスの現代的意義」の他, 羽鳥卓他, 橋本比登志, 柳田芳伸の三論文がある。第2号にはサセックス大学のD. ヴィンチとニューイングランド大学のJ. プレンの英文ペーパーがのっている。第3号には赤沢昭三のマルサスとキリスト教についての, また内海健寿の「道徳的抑制」についての論文がおさめられていて, 経済学者マルサス以外の側面も視野に入っていることがわかる。毎号マルサス学会総会記事や会則などものっている。第4号まで(1994年10月)でている。現在学会事務局は南山大学にうつり, 会長は森茂也にかわった。

(4)トロツキー

『トロツキー研究』, 季刊, 編集発行トロツキー研究所, 1991年11月, B 5版 56ページ, 定価1030円。発売柘植書房。「トロツキーを中心とする文献の収集・

保管・研究・紹介を目的として」1991年5月創立されたトロツキー研究所から発行。第1号は「ローザ・ルクセンブルク特集」で、トロツキーのローザ論が紹介されている。原則として季刊で、毎号つぎのような特集がある。②社会主義と民族問題、③ネップと社会主義建設、④経済的冒険主義批判、⑤10月革命の擁護、⑥トロツキーの哲学・科学思想(1)、⑦同(2)、⑧トロツキーの文学・芸術論(1)、⑨同(2)、⑩世界資本主義と長期波動(1)、⑪同(2)、⑫バルカン戦争と民族問題、⑬パルヴスとロシア革命、⑭平和のための闘争。⑮エンゲルス没後100年（1995年5月、156ページ、1442円）。

⑮は西島栄「特集解題」と本研究所以幹事佐々木力「エンゲルス、トロツキイ、マルクス主義文献学」を巻頭におき、トロツキーのエンゲルス論3篇（いずれも本邦初訳）を収録している。他に本号には追悼レイモン・モリニエ（1904—1994）としてモリニエの「トロツキーとの出会い」（湯川順夫訳）や緒方康の書評『中国トロツキスト史』（唐宝林著）などがのっている。

なお本研究所から会員あてに『ニュース・レター』が頒布されており、第12号には湯川順夫「トロツキーの民族理論——バルカン問題を中心に」がのっている。

トロツキーの思想は大正末期には山川均の『レーニンとトロツキー』が広くよまれるなどわが国でも関心が高かったが、昭和に入ると関心がうすくなり、戦前のわが国ではあまり紹介されず、したがって研究もとぼしかったが、戦後、とくに最近ではドイツチャーの『トロツキー伝』（山西英一訳）や、『トロツキー著作集』（全11巻22分冊、柘植書房、現在7巻14冊が出ている。全体として23巻になる予定。）の刊行（内容見本に推薦の言葉を山西英一と湯浅起男がかいて）や、トロツキー研究所の設立と本誌の発行などにより、わが国でもようやく本格的な研究が生れる機運になったようである。